

キリストのかたち(12)恵みで始まり、恵みで終わる

コロサイ 4:18

今日の礼拝説教のみことばはコロサイ4章18節つまりコロサイ書の一番最後のことばです。ということはお気づきになられたかと思いますがコロサイ書を「キリストのかたち」というテーマで読んできましたが12回目の今日が最後となります。そして最後は「恵み」で終わります。コロサイ人の手紙は「私たちの父なる神から、恵みと平安があなたがたにありますように」(1:2)という祈りで始まり、「恵みがあなたがたとともにありますように」(4:18)の祈りで終わっています。ですから今日の説教題のようにコロサイ書は恵みで始まり、恵みで終わっているのです。コロサイ書だけではありません。クリスチャンの人生は恵みで始まり、恵みで終わってゆくのです。ところで10月31日は宗教改革記念日とされています。それはマルチン・ルターが、教会の扉に95ヶ条の論題を貼り付けた日であったことから記念日とされています。私たちのようなプロテスタント教会はここから始まりました。宗教改革の原理は、「信仰のみ」、「聖書のみ」、そして「万人祭司」と言われています。確かにその通りなのですが、もうひとつの大切な原理、「恵みのみ」ということも忘れてはなりません。教会が多くの人を集め、財産を持ち、力を持つようになると、自分の力に頼って何かをしてしまい、教会を生かしているキリストの恵みから離れてしまうことがあります。クリスチャンも、少しばかり良い行いができるようになると、自分の善良さや信仰深さによって自分が赦され、救われているのだと勘違いしてしまいます。「恵み」という言葉を口にしている、キリストの恵みから遠ざかってしまうことがあるのです。

聖書は「あなたがたが救われたのは恵みによるのです。」(エペソ2:5)「この恵みのゆえに、あなたがたは信仰によって救われたのです。…行ないによるものではありません。だれも誇ることのないためです」(エペソ2:8,9)と教えています。宗教改革者たちは、この神の恵みを再発見しました。イエス・キリストの救いのメッセージは「神の恵みの福音」(使徒20:24)と呼ばれています。教会はキリストの恵みによって生かされてはじめて、この恵みの福音を宣べ伝えることができ、クリスチャンはキリストの恵みに満たされてはじめて、福音をあかしすることができます。宗教改革は、神の恵みに立ち返り、キリストの恵みに信頼することを、改めて私たちに教えているのです。それは今も同じです。伝道するにしても、奉仕をするにしても神の恵みが何よりも最初に来ます。神の恵み抜きでは奉仕は義務となり、伝道は事業となってしまいます。では、どのようにしてキリストの恵みに立ち返り、それに信頼し、恵みのうちに生きることができるのでしょうか。恵みに生きるために必要なこと3つ取り上げたいと思います。それは「認めること」、「信じること」、「告白すること」この3つです。

1) キリストが必要であると認めること

認めるとは自分にはキリストが必要であるということを受け入れるということです。ある人が「恵み」を定義して、こう言いました。「恵みとは、それを受ける資格のない者に対する神の愛である。」ですから、キリストの恵みを求めることは、自分は聖い神の前に出るにふさわしくない者だということ認めることから始まります。しかし、多くの場合、人間のプライドがそれを妨げます。「自分は完全ではないけれど、正直に、善良に生きてきた。神はそれに報いてくれてもいいではないか。」「『恵んでください』などと、物乞いのようなことを言わなければならないほど落ちぶれてはいない」などという思いが頭をもたげて来るかもしれません。人に知られている部分がどんなに立派であったとしても、神だけが知り、またその人だけが知っている部分に、神のみこころにそぐわないものがあれば、その人は罪を持っており、キリストの恵みを必要とする罪びとなのです。

聖書のすべての著者は神の恵みを強調し、キリストの恵みをあかししていますが、とりわけ使徒パウロはそうでした。それは、パウロが、かつて、教会に敵対し、クリスチャンを迫害していたことと関係があります。それでパウロは自分を「使徒の中では最も小さい者」(コリント第一15:9)と呼んだだけでなく、「すべての聖徒たちのうちで最も小さな私」(エペソ3:8)だと言い、さらに「罪人のかしら」とさえ言っています。パウロは、テモテへの手紙第一にこう書いています。「私は以前には、神を冒瀆する者、迫害する者、暴力をふるう者でした。しかし、信じていないときに知らないでしたことだったので、あわれみ

を受けました。私たちの主の恵みは、キリスト・イエスにある信仰と愛とともに満ちあふれました。「キリスト・イエスは罪人を救うために世に来られた」ということばは真実であり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。しかし、私はあわれみを受けました。それは、キリスト・イエスがこの上ない寛容をまず私に示し、私を、ご自分を信じて永遠のいのちを得ることになる人々の先例にするためでした。」(テモテ第一 1:13-16) パウロは、自分の罪を認めました。そして、その罪を赦してくださいと神のあわれみ、キリストの恵みを求めたのです。人は自分の罪に本当に気づいたなら何とか赦してもらいたいという思いが起こるはずですが、そのような思いが起こらないなら、それは気づいていないか、気づこうとしていないということです。神様を医師に例えるなら、医師が病気(これは罪のことです)と診断しているのに、自分は病気でないと言い張るようなものです。キリストの恵みに生きる第一歩、それは、自らの罪を見据え、それゆえ赦しを、つまりキリストの恵みを必要としていることを認めることです。聖書ではそれが「私を憐れんでください」「赦してください」「罪を取り除いてください」で表されます。

2)キリストを信じること

次にキリストの恵みに生きるために必要なことそれはキリストを信じることです。キリストはすべての人の罪を背負って十字架の上で苦しみ、死なれ、その罪の償いを一切果たしてくださいました。このことは旧約聖書に預言され、新約聖書にくわしく描かれています。しかし、このことを「なるほど、そうだったのか」と知り、認めるだけでは、「信じること」にはなりません。キリストの十字架を一般的な事実として認めるだけでなく、キリストは、この「私」のために十字架で死なれたことを受け入れる必要があります。十字架に示されたキリストの恵みを感謝して私が受け取ること、それが「信じる」ということなのです。

宗教改革者ルターは司祭であり、聖書の学者でありながら、この恵みを見失っていました。ルターは修道士として自分を聖めよう、正しく生きようと懸命に努力しました。けれども、努力すればするほど、自分の罪深さが見えてくるだけでした。しかし、ルターは聖書の研究によって、キリストの恵みを再発見するのです。ルターをはじめ、当時の人々はキリストを裁き主と見ていました。キリストが裁き主であることは、使徒信条に「かしこより来たりて、生ける者と死にたる者をさばきたまわん」とあるように、その通り、正しいことです。しかし、キリストは正しい裁き主であるということで終わるなら律法つまり神の基準によって白黒をはっきりさせるわけですから誰も正しい者として残れる者はいません。より神の救いに遠い者であることが明らかにされるだけです。しかし聖書はキリストは、裁き主であると同時に救い主でもあることを教えています。そもそも救いは裁かれる者であるからこそ必要なのです。キリストは裁き主であるからこそ救い主になることができ、救い主であるからこそ、この世を裁く権威をもっておられ、その裁きは正しいのです。もちろん教会はそのことを教えてきました。しかし、その時代の人々は、その教えを正しく受け取っていなかったのです。ルターがこのこと、つまりキリストだけが人を裁くことが出来るだけでなく、キリストだけが人を救うことが出来ることに気づいたのは聖書を研究していたときでした。詩篇 22:1 に「わが神 わが神 どうして、私をお見捨てになったのですか」とあります。これはイエス・キリストが十字架の上で叫ばれたことばです。ルターは考えました。なぜ、キリストは神に見捨てられ、こんな悲痛な叫び声をあげなければならなかったのか。世界を裁くべきお方がなぜ、神の裁きのもとにあるのか。それは、キリストが、罪びとの身代わりとなって罪の審判を受けられたからでした。キリストが罪びとの立場に立って罪の赦しを勝ち取ってくださいました。ここに神の恵みがある。信仰によってこの恵みを受け取ることによって、人は罪の赦しを受け取る。ルターはこの確信に導かれ、神の恵みを信じ受け入れ、やっと心に平安を得ることができました。

ルターが福音の真理を再発見し、それによって心に平安を得たことが、宗教改革になったのです。現代の私たちも、罪びとである私を救うことが出来るのはイエス・キリストの恵み以外にはないことを知り、信じる時、はじめて、罪の重荷から解放され、心に深い平安と本物の喜びを受けるのです。あなたは、

このキリストの恵みを知っているでしょうか、それを受け取っているでしょうか。もしそうでなければ、キリストの恵みがどんなに素晴らしいものかを求め、受け入れていただきたいと思います。神は求める者にならず与えてくださいます。

3) 告白すること

最後にキリストの恵みに生きるために必要なことはキリストを告白することです。「告白」という言葉は、日本語では、男女がその愛を打ち明けるとか、「コクル」と言うそうですが、犯罪を犯した人が自分がやったことを白状するときに使われますね。聖書がいう「告白」はそうではありません。聖書で「告白する」という言葉には「同じことを言う」という意味があります。何と「同じことを言う」のでしょうか。神が示された真理に対してです。神のことばに対して、「はい、その通りです」と返答することです。

ローマ 10:9-10 にこうあります。「なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせたと信じるなら、あなたは救われるからです。人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。」ここには人ほどのようにして救われるかがはっきりと書かれています。「人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われる」とあるように、それはイエス・キリストを心に信じ、そして次に、心に信じたことを口で言い表わすことによってです。「心に信じる」とありますが、何を信じるのでしょうか。神が人間に示してくださったすべての真理ですが、とりわけ、イエス・キリストが私の罪のために十字架で死なれ、私を救うために三日目に復活されたことです。そして、心で信じたそのことを、使徒信条にあるように、「キリストは…十字架につけられ、死にて葬られ、陰府にくんだり、三日目に死人のうちよりよみがえり、天にのぼり、全能の父なる神の右に座したまえり」と、自分の口で言い表わすのです。このように聖書が言う「告白」は、自分のプライベートな部分を人前であからさまにするというのではなく、自分の内面に与えられた信仰を神に向かって言い表わすことです。告白は、神に対してするもの、キリストに向けられるものです。

聖書には、短いことばに要約された信仰告白のことばが数多くありますが、その中でいちばん短いのは、「イエスは主」ということばです。「イエスは主。」この信仰の告白には、イエスが神の御子であること、人類の救い主であり、全世界の王であり、また私たちの人生の主であることが含まれています。ですから、「イエスは主」という告白は、イエス・キリストへの信仰をはじめて言い表わすとき、洗礼を受けるときにだけなされるものではなく、私たちの生涯を通して、ことばと行いによって告白され続けなければならないものです。常に神の真理を再確認し、そのつど、それを言い表わしていく、それによってキリストの恵みに生きることができるようになるのです。

コロサイ人への手紙だけでなく、パウロほどの手紙にも、その最後に「主イエスの恵みが、あなたがたとともにありますように」あるいは「恵みがありますように」と書いています。手紙の最後に「恵みがありますように」と書かれているのは、私たちが何をやるにも、恵みが必要であることを教えています。人は恵みによって救われます。では救われた人にはもう恵みはいらなくなるのでしょうか。天に至る道は恵みでスタートするけれども、後は自分の力でやり遂げるものなののでしょうか。いいえ、そうではありません。クリスチャンの生涯は、恵みで始まり、恵みによって導かれ、恵みによって終わります。終わりはエンド(END)です、エンドには別に「目的、目標」という意味があります。これは一番最後、端はその次の始まりに近いということです。例外なく誰でもこの世における人生を終わりを迎えます。しかし、クリスチャンにとってはこの世における生涯の終わりは次に始まる神と共に永遠に生きるという目標の転換点でもあるのです。そしてこの世にあっても、次の世にあってもそれを支えているのは神の恵みなのです。

へりくだって、神の恵みの必要なことを認めましょう。そしてその恵みを素直な信仰で受け入れましょう。心に与えられた信仰をことばと行いで言い表わしましょう。これによって、主であるイエス・キリストの恵みを生活の中で体験していきましょう。それをさらに豊かに体験する道を共に求めていきましょう。祈ります。